

EDEN Amplifier meets T\$UYO\$HI [The BONEZ]

小型! 軽量! しかし高機能でハイ・パワー!! ベーシストの夢がすべて詰まった最新鋭アンプの実力

小型で軽量、しかし機能性に優れた新型アンプがEDENから発売された。この新シリーズ“Tera Nova”は、同社のフラッグシップ・モデル、“World Tour Pro”シリーズ譲りの操作性とサウンドを誇る新モデルで、ステージ・パフォーマンスにも対応可能なハイ・パワー・アンプなのだ。今回は現在The BONEZのベーシストとして活躍するT\$UYO\$HIに、その新型EDENアンプの実力を試してもらった。彼が体感したEDENサウンドの魅力を余すことなく伝えていこう。

Text / GENTARO YAMAMOTO Photo / WATARU NISHIDA [WATAROCK]

製品のお問い合わせ先 / ヤマハミュージックジャパンお客様コミュニケーションセンター ギタードラムご相談窓口 [0570-056-808] (ナビダイヤル)



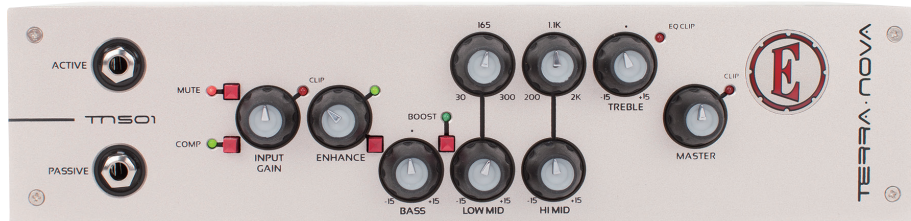
T\$UYO\$HIが思い描く EDENの印象と求めるサウンド

「EDENのアンプはPay money To my Pain (以下、P.T.P) 時代にWT-800を使っていて、安室奈美恵ちゃんのツアー・サポートをしたときもメイン・アンプだったかな。俺の印象ですけど、EDENのアンプはローが潰れずに出る。チューブ・アンプみたいに歪ませてブワッと出るんじゃなく、すごくハイ・ファイなんです。特にP.T.PのときはチューニングがローCだったから、ロー・エンドをしっかり出してくれるのが気に入っていましたね。このTN501も、ルックスは色合いが多少変わったけど、やっぱり高級感があるし、サウンドの印象も上品でワイド・レンジ。EDENと言うと、フュージョンとか歌モノ系の人が使っているイメージだけど、ロー・エンドもクリアに出してくれるんで、ダウン・チューニングのロック・バンドとかにもオススメですよ。TN501はコンパクトだけど音量もかなり大きいし十分使えるアンプです。

俺がアンプに求めるものは、とにかくテンションを上げてくれるかどうかってこと。特にライブだと、出音が良くて、気にしなくちゃいけない要素が少なければ、それだけストレスなくステージに立てる。演奏に集中して、良いライブができると思うんですよ。それと、アンプの音っていうのは、自分が作った音、自分の主張でもある。外音はラインも含めてPAさんがバランスを取って作っているものだけど、それにしてもステージで鳴らしている自分の音に準じて作ってくれているはず。そういう意味でやっぱりアンプの音は、“こういう音を出したいんだ!”という自分の主張なんですよ。あと、ライブだともちろんそれなりの音量も欲しい。レコーディングではそれほど音量を上げなくても良い音になるけど、ライブは身体で感じる圧も重要なんですよ。特にベースのロー感っていうのは、身体で感じるもの。そういうパワーもアンプやスピーカーに求めるし、今回のTN501とTN410のセットはすごく満足の行くものでしたね」(T\$UYO\$HI)

EDENの最新モデル“Tera Nova”シリーズをT\$UYO\$HIはどう斬るか!?

Front



TN501 ¥85,000 [税別]

▲重量わずか2.4kgほどながら500Wの高出力を誇る新シリーズ。4バンドEQに加え、EDEN独自のエンハンス・コントロールも装備し、柔軟な音作りに対応してくれる。ライブでの使用はもちろん、外部音源入力とヘッドフォン・アウトも搭載しているので、自宅練習でも重宝する1台だ。

Back



TN410 ¥110,000 [税別]

▲オリジナルの10インチ・スピーカー4発と、ON/OFF可能なツイーターを装備したキャビネット。旗艦モデルであるDシリーズ譲りのワイド・レンジでクリアな出音、反応の速さが特徴だ。

直感的な操作で求める音像に素早くアクセス

「WT-800を使っていたときも、俺はこのツマミを“ドンシャリ・マシン”って呼んでましたけど、よく使っていたコントロールですね。このツマミは、例えばローをしっかりと出したんだけど、アタック感も欲しいっていうときに、ローを活かしたままアタックを生み出すハイの部分付け足すという使い方もできる。ローとハイはセットみたいなものなので、低音だけをパワーっと出しても何を弾いているか

分からなくなってしまう。そこを上手く調整できるこのツマミはかなり使い勝手が良いですよ」(T\$UYO\$HI)

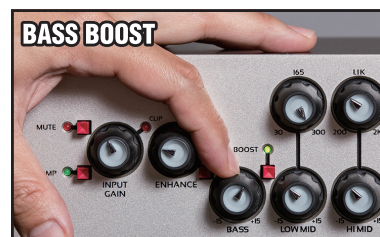


▲各帯域のブースト&カットを連動して行い、簡単にドンシャリ・トーンが作れるコントロール。

轟く重低音をワン・タッチで加えるベース・ブースト機能

「普段は必要以上のローは出さないんですけど、このTN501のローの出方はかなり好きで、少し上げ目にしましたね。最初は俺のいつものチューニングのドロップDで弾いていましたが、ローBに下げても良い感じでしたし、ダウン・チューニングで力を発揮するアンプだと思います。それと、このBOOSTスイッチも良くって、ローを強調してくれるんだけど、全体像がイビツにならないのはすごいです。普

通はどこかを上げればどこかが埋もれちゃうんですけどね。ちゃんと使えるローですよ」(T\$UYO\$HI)



▲BASSコントロールの増幅量を拡大し、さらに迫力のある低域を生み出すことができる。

ミッド・レンジをより多彩に仕上げるEQ搭載

「ひと口にミドルと言っても、色と同じで弾き手として必要なミドルと、PA的に削りたいミドルは違ったりするわけです。それが、2バンドのパライコどどちらも調整できる。そこは嬉しいポイントですね。やっぱりベースにとってミドルは重要で、音の“身”の部分だと思いますから。それと、EQは上げる方向より、不要な部分を削るっていう使い方の方が上手く音作りできると思いますよ」(T\$UYO\$HI)

「ひと口にミドルと言っても、色と同じで弾き手として必要なミドルと、PA的に削りたいミドルは違ったりするわけです。それが、2バンドのパライコどどちらも調整できる。そこは嬉しいポイントですね。やっぱりベースにとってミドルは重要で、音の“身”の部分だと思いますから。それと、EQは上げる方向より、不要な部分を削るっていう使い方の方が上手く音作りできると思いますよ」(T\$UYO\$HI)



▲TN501のEQは、中域が2帯域に分かれた計4バンド仕様。さらにLOW MIDは30～300Hz、HI MIDは200～2kHzで帯域を選択でき、よりきめ細やかな音作りが可能だ。

T\$UYO\$HIが薦めるセッティングはコレだ!

「ダウン・チューニング系で使えるセッティングで、ローは少し上げ目、代わりにロー・ミッドを少し削っています。抜けやアタック感はハイを上げるんじゃないって、ENHANCEやツイーターをONに

する方がよりワイド・レンジに出てくるんじゃないかな。あと、これはあまりマネしちゃうんだけど笑)、GAINはクリップを少し超えるぐらいが俺のお気に入りです」(T\$UYO\$HI)



▲T\$UYO\$HIは、コンパクトのPJスタイルで試奏。LOW MIDは300Hzを若干カット、HI MIDは800Hz辺りを若干カットしたセッティングだ。ドンシャリとまではいかないが、中域を抑えることでやや引き締まった音像を作り出す。

すぐくクリアだしワイド・レンジに音を出してくれます

「WT-800を使っていた頃は、スピーカーもEDENの10インチ4発のもので、それもローの出方がか気に入ってましたね。このTN410は、ちょっとダウン・サイジングしたみたいだけど、すぐくクリアだしワイド・レンジに音を出してくれます。あと、ツイ

ーターをON/OFFできますけど、これだけでハイの出方がかなり変わるので、例えばアタック感や抜けは出したいけど、トレブルを上げると少し音が硬くなる、耳に痛くなるっていうときは、ツイーターをONにするっていうのも試して欲しいですね」(T\$UYO\$HI)

